



Title	Miltonic Choreography
Author(s)	川島, 伸博
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44757
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	川島伸博
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18313号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学位論文名	Miltonic Choreography (ミルトンのコレオグラフィ)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 助教授 服部 典之 助教授 片瀨 悦久

論文内容の要旨

本論文は、イギリス17世紀の詩人ジョン・ミルトン(1608-74)の主要詩作品において、「ダンス」のモチーフが詩的世界の創造、イメージ、および構成原理にいかにか深く関わっているかを明らかにすることにより、ミルトン文学の読み直しを目指した研究である。論者は、「ダンス」が詩的テキストにおいて果たす多面的な機能を総称して「コレオグラフィ」(振り付け、舞踏術)と呼んでいる。論文は、英語で書かれ、その全体は、序論、7つの章、結論、付論1篇から構成され、本論、図版、注、参考文献を含めて、A4版で計183ページから成っている。

序論は、先行研究を概観して、ミルトン文学において「ダンス」のもつ重要な意味の考察が不十分であったことを指摘する。まず第一部において、ミルトンの初期作品において「ダンス」のモチーフが肯定的に扱われ、それが詩的世界の豊穡性の創造に結びついていることを明らかにする。第一章は、「五月祭の朝に寄せる唄」「十一月五日について」『アルカディアの人々』などの初期の詩作品において、ルネサンス人文主義精神のなかで「ダンス」が謳歌されていることを指摘する。第二章は、『快活の人』と『沈思の人』を対照的に捉え、前者には「ダンス」のイメージが不可欠のものとして描かれているのに対し、後者の詩においては「ダンス」のない世界が描かれ、これが後期ミルトンの宗教改革的側面を予表するものであると主張する。第三章は、1630年代に入って現れてきた、「ダンス」に批判的なピューリタンのダンス・コードの意味を考察する。第四章は、30年代の代表作『コウマス』を取り上げ、この仮面劇が「ダンス」に肯定的なルネサンス精神と否定的なピューリタンの傾向のなかで、二重のコードによる拘束のもとで創造され、「ダンス」の描写に変容が見られることを明らかにする。

第二部からは、ミルトンの後期作品を対象にして、「ダンス」のモチーフが不在のかたち、あるいは痕跡として表現されている面を明らかにすることにより、このモチーフの重要性を一貫して主張する。第五章は、ピューリタンとしてのミルトンにおいて「ダンス」に対する否定的姿勢が現われるありようを説き明かす。第六章では、この舞踏とコーラスをつかさどる詩神テレプシコーラの追放が詩人の詩作法に大きな影響を与えたのではないかと主張し、この傾向が、『闘士サムソン』におけるコーラスの変容や、『樂園喪失』におけるブランク・ヴァースの完成に深く関わっていることを検証する。第七章は、この痕跡としての「ダンス」は、叙事詩における登場人物たちの動きに与えられた振り付けにおいて窺えるものと指摘し、『樂園喪失』における二種類の椅子(throneとseat)をめぐる展開する登場人物たちの身振りに注目する。以上の論を踏まえて、論者は、ミルトンにおいては「ダンス」は初期の詩にお

いては重要なイメージを形成し、後期の詩においては詩作原理に深く関わるモチーフであったと述べ、「ダンス」の果たす機能の重要性を強調して論を締めくくる。

付論は、throneによる王権表象の歴史的コンテクストを探り、『楽園喪失』に隠された政治的メッセージの意味を考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス詩の世界に巨大な位置を占めて聳えるジョン・ミルトンの文学を「ダンス」のモチーフの存在と変容、さらには、このモチーフの消失と痕跡という統一的視点から読み直すことを試みた斬新で意欲的な研究である。初期作品から中期の『コウマス』を経て『楽園喪失』に代表される後期の偉大な叙事詩に至るミルトンの詩的展開を、「ダンス」をめぐるルネサンス人文主義とピューリタンの宗教観との交錯あるいは対立として巨視的に捉えることにより、ミルトンの詩的世界の特質とその意味をスリリングに説き明かした。注目すべきは、詩人ミルトンが「ダンス」に愛着をもって肯定的に詩的世界に取り込む相を明らかにするだけでなく、ピューリタンの精神性を強化してゆく後期詩作品にあっても「ダンス」のモチーフが痕跡として存在し、それが詩的構成原理に関わっている層を掘り起こそうとした論者の慧眼でしなやかな視角である。また、ルネサンスから内乱時代にかけて文学世界の外部で起こった「ダンス」論争に目を配っていることも、論考に深みと幅を与えていよう。

本論文は、このようにミルトンの詩的世界を斬新な視角から読み直しを行なった優れた論文であるが、問題点がないわけではない。まず、「ダンス」のモチーフの捉え方が、芸術的・祝祭的側面から、芸術ジャンル・文学的慣習としてのダンス、さらには、身体的動き・運動のリズム性に至るまでいくつかの次元にわたっているため、論の展開にやや不統一感を与えることは否めない。また、「ダンス」のモチーフの変容を、ミルトンの詩作品相互の関係においてより詳細に論じてほしかった恨みも残る。発想の斬新さや着眼の鋭さを一層有効に生かすための論理的緻密さも求められよう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。